

実践事例

漢字仮名交じりの書 創作

—— “ことば” を伝える書 ——

獨協埼玉中学高等学校 講師 梨本佳世

対象 第2学年（1クラス17名、2クラス開講）

科目 書道Ⅱ

用具・用材 半切2分の1サイズ（縦横自由）

1. 単元名

書道Ⅱ「漢字仮名交じりの書」

2. 単元設定の理由

「漢字仮名交じりの書」を“ことば”を伝える書として位置づけ、作品制作を行う。その始まりとして、生徒自身が日々何を思い学生生活を送り、何に興味関心があり、どのような言葉に心を動かされるのか、ということをも自分に問いかけ、改めて目を向けることに、まず大きな意味がある。生徒たちの心の叫びとも言える言葉や短文を素材として、時間をかけて自らの書表現として形にすることは、将来の自分への希望と不安の中で生きる彼らにとって、精神性においても前進につながる重要な学習活動であると考えている。

書道Ⅰ、Ⅱの授業で行ってきた、模倣に重きをおいた古典の臨書学習が、自己表現に展開するための重要な基礎となり、更に古典のもつ力や表現の可能性について改めて気づく機会となつてほしい。作品制作の中で自己との対話を繰り返し、悩み、時に他者からの意見を取り入れながら客観的な視点で物事を整理する、そして自分の限界まで力を出し切るという経験は、今後の社会生活において自分を支える一助となつてくれると考えている。

仲間と制作時間を共にし、互いの作品を鑑賞する際に表現の意図を発表したり、作品の魅力を伝えあったりする活動により、作品のよさだけでなく、それぞれの個を認める姿勢や他者への理解を深められるようになることを期待したい。

3. 単元の目標

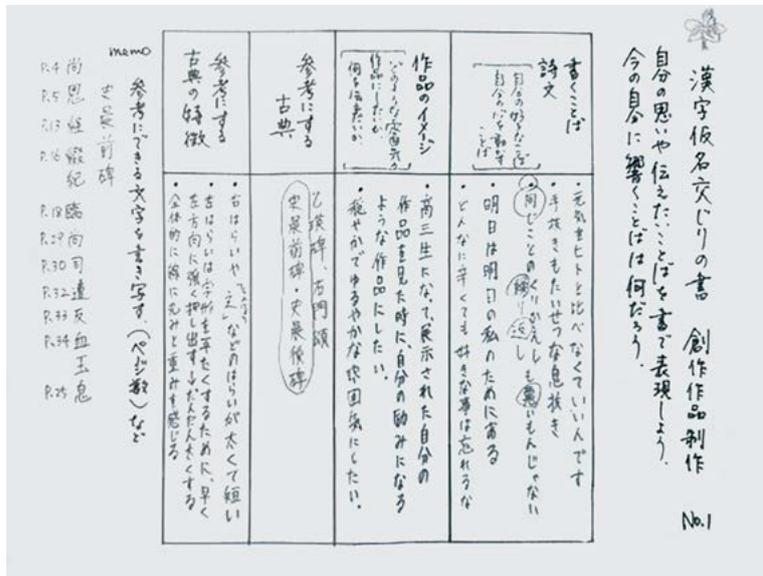
1. 現在の自分に真剣に向き合い、表現したい“ことば”を探す。
2. 自らが表現したいと思う世界観に合う古典を選択し、筆法や書風の根拠を見つけることで、より深く古典を理解し、古典のもつ力を再認識する。
3. 選択した古典から手がかりを探し、漢字に調和する平仮名について考え、表現を工夫する。
4. “ことば”のもつ世界やリズムを大切にし、“ことば”の伝わり方を考えながら全体の構成を工夫する。
5. 書に自分の思いや“ことば”を託す姿勢、主体的な活動と自らの作品発表に責任をもつ意識を養う。
6. 古典を生かしながら、個性的な自己表現を工夫する。
7. 作品を客観的に鑑賞する力や、他の作品に対しても自分なりの意見をもつ姿勢を養う。

4. 指導と評価の計画 [学習活動の概要]

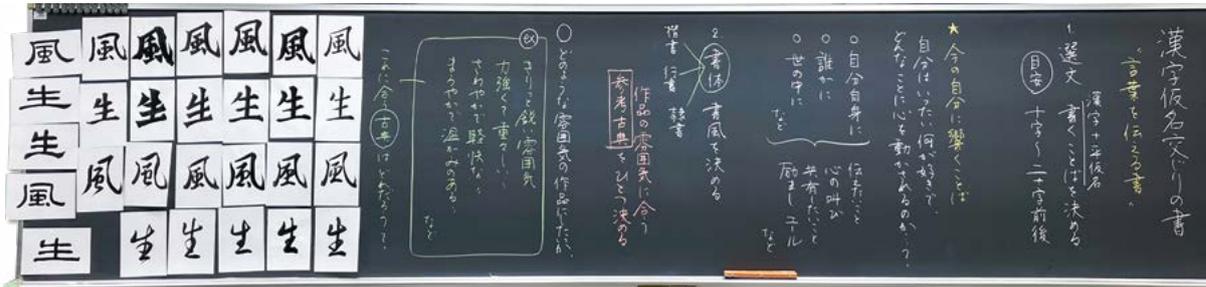
(1) 好きな言葉や現在の自分に響く文章を考える。

- 前授業から予告しておく。

ワークシート1(生徒記入例)



板書例1



評価

- ▶ 高校2年生として無理のない、等身大の言葉を見つけている。
- ▶ 自分の勝手な思いだけでなく、作品の伝わり方に配慮して言葉を吟味している。

(2) 自分がどのような雰囲気のある作品を目指しているのか、おおよそのイメージを言葉にする。

評価

- ▶ 書で表現することへ能動的な姿勢をもち、想像力を働かせている。

(3) 書道I、IIで学んできた古典に加え、教室に提示された古典を鑑賞し、自分の作品のイメージに合う古典を選択する。

- 楷書、行書、隷書の古典18種類程度を提示しておく。(作品のイメージにつながるよう、別のプリントでも古典を紹介)

第1次(2時間)

(1) 選択した古典の臨書をする。(半紙に4~6字を2か所、最低8字以上練習)

- 添削の後、清書したものを2枚提出させる。

評価

- ▶ 古典の特徴を捉え、理解して書いている。

(1) 自分が書く“ことば”に使う漢字や平仮名の参考になる文字を、各々が参考にした古典からできるだけ多く探し、ワークシートに切り貼りする。

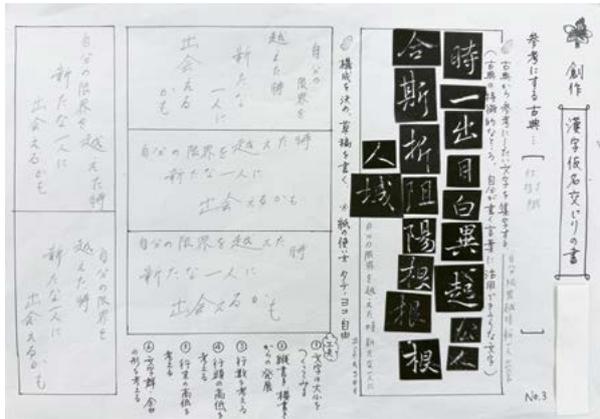
ワークシート3-1 (生徒記入例)



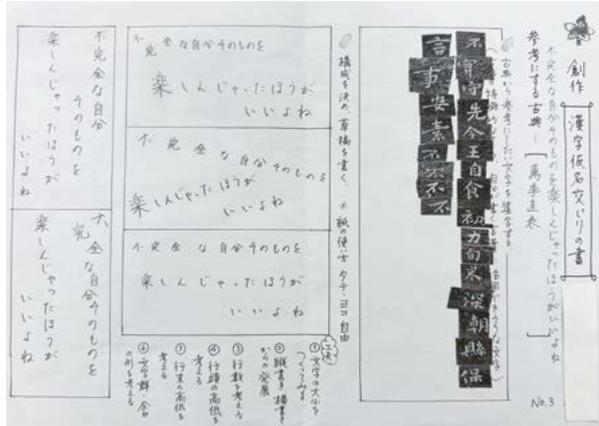
ワークシート3-1 裏面 (生徒記入例)



ワークシート3-2 (生徒記入例)



ワークシート3-3 (生徒記入例)



評価

- ▶ 表現の幅を広げるために古典をよく観察し、ヒントとなる文字を探し出している。

(2) ワークシートで作品の構成について考え、鉛筆で草稿を書く。

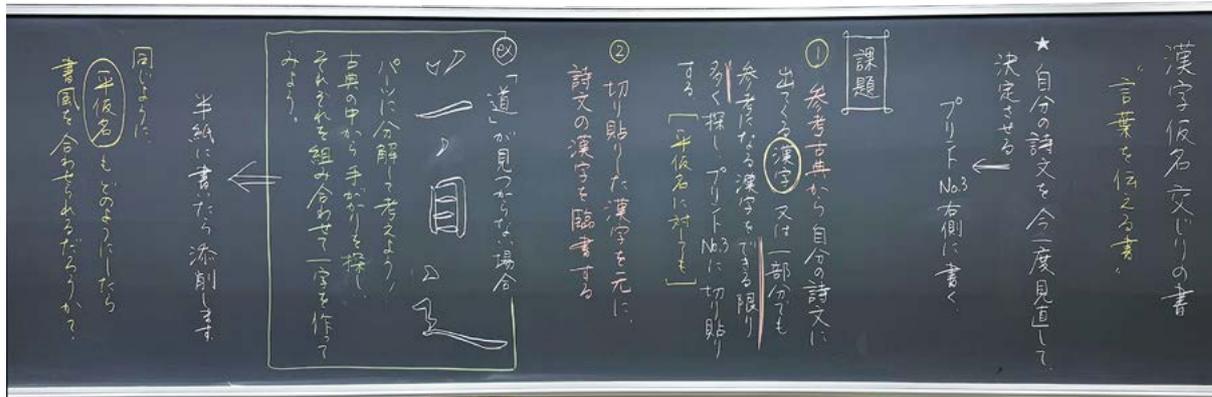
評価

- ▶ 構成を工夫し、草稿のバリエーションを増やしている。
- ▶ 構成の違いによって、言葉の伝わり方が変化することに気づいている。

(1) 古典を参考に、自分の“ことば”に使う漢字を半紙に練習し、清書する。

- 使う漢字が古典の中にある場合について、部首や点画を分解して、部分ごとに古典からヒントを得るように解説する。

板書例2 古典からヒントを得る



(2) 古典を参考に、漢字に調和する平仮名の字形を工夫して練習し、清書する。

- 漢字・平仮名共に、現時点で考えられる範囲で練習させる。その際、文字の大小にも配慮するように指示する。

板書例3 古典に寄せた平仮名とは



※ここでは、チョークをお湯や水で溶いたものを使って板書している。(消しにくいこともあるので、取り扱いには注意が必要。)

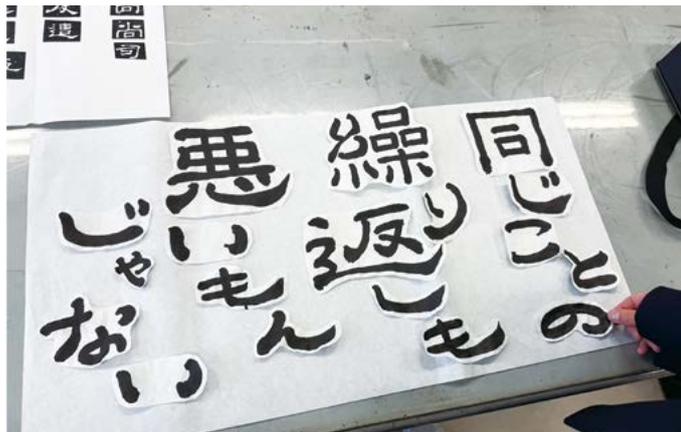
評価

- ▶ 手本のない文字に対して、自分の力で古典に則った書に近づけようとしている。
- ▶ 添削を経ながら、全ての文字に根気強く向き合って表現しようとしている。

第4次 (4時間)

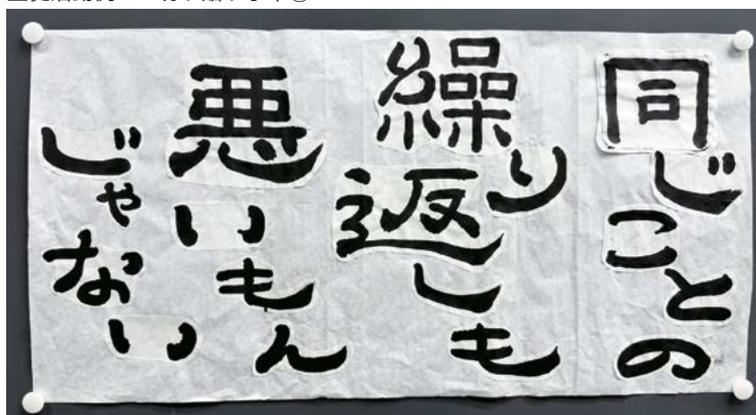
(3) 半紙に清書した文字を全て切り取り、それを半切二分の一の紙に並べ、改めて配置を考える。

生徒活動例 1

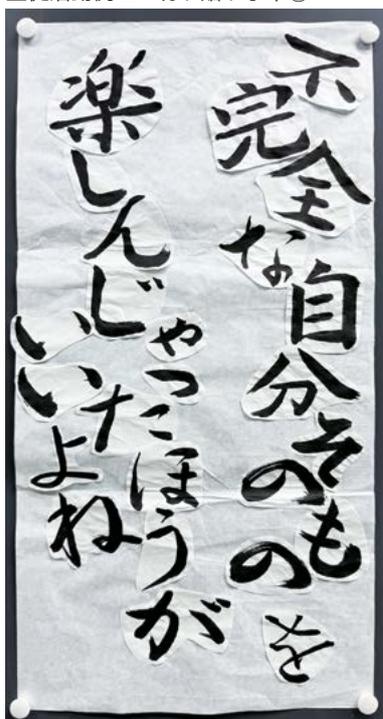


(4) 文字を糊付けし、自分の手本を作る。

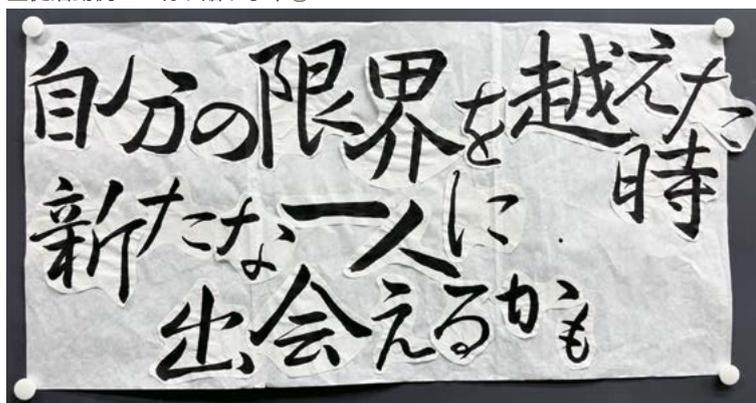
生徒活動例 2 切り貼り手本①



生徒活動例 2 切り貼り手本②



生徒活動例 2 切り貼り手本③



評価

▶ 文字の配置に表現の意図や工夫が感じられる。

(1) 半切 2 分の 1 の紙に制作する。

- 伝えたい“ことば”の熱量に応じて、文字の大小や配置を工夫できるよう促す。
- 作品を受け取る側の視点を示し、読みやすく、より“ことば”が伝わりやすくするための工夫をいっしょに考える。
- “ことば”を塊として捉えることで、読みやすさへつながることに気づき、余白の形への配慮を促す。
- 仲間どうしでの率直な意見交換を促す。

評価

- ▶ 書表現に主体的に取り組んでいる。
- ▶ 参考とした古典の特徴を表現に生かしている。
- ▶ 自己表現へのこだわりを失わず作品を客観的に観察して、根気強く改善しようとしている。
- ▶ 真剣に自分の書に向き合い、限界まで力を出し切っている。

(2) 2 学期の授業で各々が制作した落款印を押す。

- 押印する場所をよく考え、印の配置によって作品の印象が大きく変化することを感じ取らせる。

評価

- ▶ 落款印の配置に気を配り、丁寧に押印している。

(1) 作品鑑賞発表会をする。

- ① 一人ずつ黒板に作品を貼り、自分の作品の表現の意図や工夫、“ことば”への思いなどを発表する。
 - ② 他の生徒は発表を聞き、作品を鑑賞して気づいたことや作品の魅力などの意見を鑑賞ワークシートに書く。
- 生徒が鑑賞ワークシートに記入している間、指導者からも一人一人へ作品の講評をする。
 - 鑑賞ワークシートに書かれた鑑賞文は、後日一人ずつ切り貼り編集をしてプリントを作成・配布し、クラスメートが自分の作品にどのような鑑賞文を書いたのか、全て読むことができるようにする。

鑑賞ワークシート

漢字仮名交じりの書 創作 ~言葉をはたかす~

高2-

★自分の作品について 《作品に対する考えや意図》

- 言葉を選んだ理由や字の込め方、筆の運び
- 表現に工夫したところ、アポイントなど
- どのような雰囲気や作品を目指したか、誰かに受け取ってもらいたい
- 制作をしながらの過程の中で感じたこと、何に気づいたこと、など

* 評価 *	
作品	発表

★友人の作品について

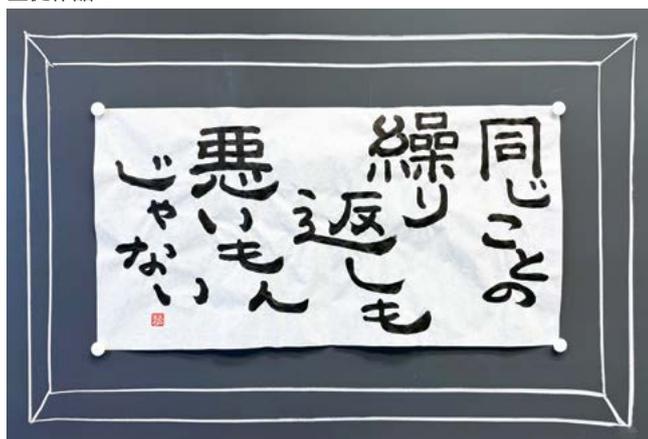
《クラスメートの作品に対する鑑賞文を書く》

よいと思うところ、作品の魅力や自分から気づいたこと、自分の好きな言葉や表現などが

名前

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.
- 6.
- 7.
- 8.
- 9.
- 10.

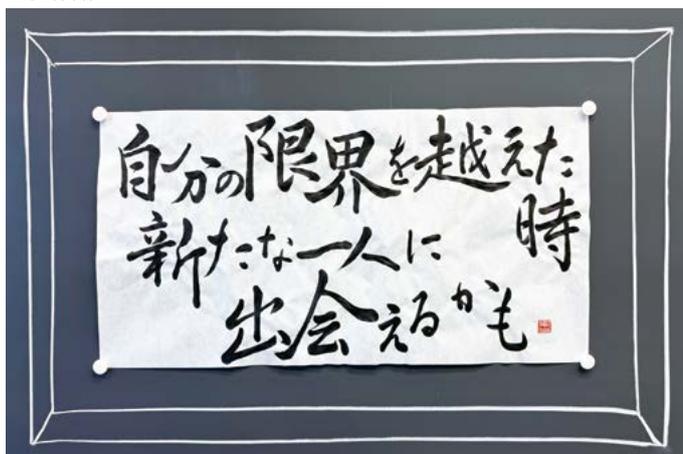
生徒作品 1



生徒作品 2



生徒作品 3



評価

- ▶ 自分の作品に責任をもち、自分なりの表現の意図や工夫を言葉にして伝えている。
- ▶ 仲間の作品鑑賞において、積極的に意見を伝えようとしている。
- ▶ 作品に対する気づきや感動を豊かな言葉で表現している。

生徒作品展示風景（作品は全て裏打ちをし、台紙に貼って装丁を整えた後、次年度の春から夏にかけて廊下に展示する。）



生徒の声・作品制作の感想(鑑賞発表会後の感想文より)

- 書き始める前と後で自分の思いや伝えたい表現が出てきて、自分はこれほど集中していたんだなと思った。古典の表現ごとに雰囲気違って、文字の装飾性の力はすごいと思った。
- 自分で一から文字選びや配置を考えるのは初めてでとても楽しいと思いました。その過程で、どういう風に配置すればきれいか、文字をどんな形にすれば伝わるかをよく考えるのが難しかった反面、完成形がどうなるのかというワクワクもあり、本当に良い経験をしたなと思いました。
- 私が中学生の時、先輩達を書いたこの創作の作品を廊下で見て、たくさん気づかされることや響くものがありました。それに憧れて書道を選択したので、この書で最後を締めくくることができて良かったです。
- 鑑賞をして皆一人一人違う完成があることに気づき、二年間書道の授業を受けた成長を感じました。
- 手本を自分で作ってから何もかもオリジナルのものを書くのが初めてで、ゴールの見えないものを完成させる辛さを感じ、いつも以上に苦戦したがいつも以上に楽しかった。
- 古典を追究することの難しさに直面しました。でも、先生のアドバイスや友達とのコミュニケーションで得られたヒントが自分の作品の完成度に関わっていて、それを楽しむことができた自分もいたので、興味を持って最後まで授業に向き合うことができました。
- 平仮名や古典に載っていない漢字を、古典の特徴を意識して書くということはとても難しかったけれど「自分で作る」という楽しさを感じることができました。
- 歴史や書き方を学ぶにつれ、どんな思いでこれを書いたのかなと考えながら書くようになり、特に今回の創作作品を作るにあたって、自分自身の文字と初めて向き合えてとても楽しかったです。

5. 考察

本校では「漢字仮名交じりの書」を全 18~20 時間という長期間で取り組み、書道Ⅰ、Ⅱの集大成として位置付けている。制作において生徒たちがぶつかる壁に、「古典に基づくこと」と「自分の表現を工夫すること」の間に隔たりができてしまい、その二点をよい距離感で融合させる方法が見つからず手が止まるということが挙げられる。改めて参考とする古典の特徴をいっしょに振り返ったうえで、筆法だけでなく構成においても、どのようにしたら古典を生かしながら、書がより魅力的に伝わるようになるのかということを探していく手助けが必要である。そのときに大切にしていることは、答えは一つではなく無限にあり、その中の一つを彼ら自身が選び出せるようなヒントを提示できるようにするということである。

例年、生徒から「この作品制作はいちばん達成感があって楽しかった」、「最後の鑑賞会で皆の意見が聞けたことが新鮮でよかった」という言葉が届く。たいへん嬉しい声であるが、その一方で私は近年の生徒たちからどこか固定化した内向きの友人関係の強まりを感じている。他者に興味関心を持ち、自ら視野を広げて交流を深めようとする力がやや弱くなっているのかもしれない。そのような中で、「書道」という共通項で集まった同級生の思わぬ胸の内が聞けたり、同じような悩みや不安を抱えていることに気づけたことで共感の気持ちが生まれ、安堵する様子も見られたりする。作品の完成を共に喜び、発表と鑑賞によって制作過程を振り返ることで、改めて皆で懸命に取り組めてきたことへの感動があるのではないだろうか。

それは時間を共にした私自身も同じである。これは決して一人では味わうことのできない感動である。それぞれの作品に、そしてそれを作った人物に刺激を受け、素直に心を動かされているということは、皆がそれぞれ作品制作に精一いっぱいの力を注いで取り組めたということにほかならない。作品についての意見を積極的にもち、それを言葉に表すことが書作品への気づきに留まらず、その制作者に寄り添い理解しようとする姿勢につながっている。ここにこの作品制作を行う大きな意味があると感じている。

生徒にとっては、これまでの臨書作品とは違い、答えの見えない作品制作でもある。初めは不明瞭だった作品のイメージも、不安を感じつつも順を追って丁寧に工程を積み重ねていけば、徐々に作品の輪郭が見えるようになり、「もっとこの部分をこうしたい」といった明確な意見ももてるようになる。その過程には、教師と生徒、生徒どうし、そして自己との対話が不可欠である。特に指導する立場としては、その生徒が何に悩み、何を望んでいるのか、どのような作品にしたいと思っているのかを常に理解しようとする姿勢をもち続け、彼らが次のステップに踏み出せるような声掛け、働きかけが重要であると感じる。

生徒どうしても回を重ねるごとに自然と互いをほめ合う姿や意見を言い合う姿が見られ、互いに高め合う環境への変化が感じられた。そして何よりも重要なのは、生徒自身が主体的に取り組み、自分自身で作品を作り上げられたという手ごたえを実感できるようにするということである。生徒一人一人の能力を最大限まで引き出せるようなアドバイスの量や声掛けのタイミング、教室の環境作りなど、最大限に配慮できるよう努め、生徒と共に作品制作を楽しみたいと考える。

作品を作る芸術の根幹は、単なる制作技術だけでなく、「なぜ作るのか」「何を伝えたいのか」という意識に深く関わっていると考える。書表現を通して仲間とその意味を創造し合えた経験が、彼らの自信につながってくれることを願っている。